
不思議の国のアリス ~ the second story ~

叶音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のアリス～the second story～

【Nコード】

N6091D

【作者名】

叶音

【あらすじ】

それは儚い夢と運命の物語…。自分の名すら分らないアリスと終わりを迎えるしかない住人達…。何を望み、何を得、何を成すため与えられた最後の時間なのか…終焉へと向かう世界で、最後の1ページがめくられる…。誰もが夢見る不思議の国。その夢の国にある誰も知らない物語。The second story…。

プロローグ

兎の穴…。

そんなもんじゃないと思ってたけど…意外とあっさり落ちるなんてな。俺は運がいいんだか悪いんだか…。

どうせあそこに帰る気なんて毛頭なかったからいいけど。

それにしても、長い。

全く視界が開けない世界にいと、だんだん思考すら停止してくる。

…むしろ記憶障害だ。なんにも思い出せねえ……

まあいい。地面に着いたらまた考えればいいさ。

…いや、着くのか??

俺の、『落ちたら底がある』という理屈は正しいのか??

…どっちだっていいか。

どうせ俺はあそこに戻らないのならなんでもいい

死んだって構わないんなら、地面に着かなくなっただって変わりはない。

…でも 笑えるよな。

兎なんていなかったのに「兎の穴に落ちましたー」なんて。

本気でこんなもん探してる気狂いがいるって思ったけど、俺はそいつらより気狂いかもな。

なんだ??

やっと、光が射しこんできた

* Alice? *

そこは、美しい深紅の薔薇が咲き誇る薔薇園だった。

澄んだ青い空の下、気持ちのいい風が吹く中にお茶会の為の準備の整った白いテーブルと椅子が二つ置いてあった。

そしてそれを目の前にした少年が一人。

太陽の光のような金色の髪に澄んだ蒼い瞳をしたその少年は、紺のズボンに白いシャツを着ていて、尻餅をついた状態でそれを眺めていた。

「おや、やつと主役の登場ですか。」

突如、背後からかけられた声に少年は驚き、振りかえった。

そこには、ブラウンの燕尾服に身を包んだ青年が立っていた。

服と同色の髪に同色の瞳。それなりに整った顔立ちをしていたが、それよりも目についたのが頭に生やしたそれも同色の兎の耳だった。

「なっ……！お前！だっ？！……白ウサギっ……！！？」

その目を疑うような光景に驚きを隠せないでいた少年は彼に問いかけた。

「違いますよ、アリス。私は三月ウサギ……。私が白ウサギだったら貴方はとうに死んでいますよ。」

そう穏やかに微笑みながら答えた三月ウサギはアリスと呼ばれた青年に手を差し出した。

「あ……りす？なんだよ、それ？大体、死ぬってどういう……っ……！！」

アリスは差し出された手を振り払った。

その対応に一度悲しそうな顔をした三月ウサギは用意されていたお茶会の席に着いた。

「お茶は如何ですか、アリス？……お話しますよ、この世界の全てと、貴方という存在の意味をね。」

その様子見たアリスは三月ウサギの向い側の席に着いた。そうして彼に向い、問いたですように言葉を投げかけた。

「…それで、ここは本当に不思議の国、か？」
その問いかけに三月ウサギは微笑み返した。

* * * * *

不思議の国は、元々一人の少女の夢から始まった。
言わずとも知れた、『アリス＝リデル』である。

彼女は人にはない夢を具体化する力を持っていて、不思議の国は一種のアパレルワールドとして存在した。

しかし、彼女のいない世界に夢は存在しない。

彼女の死後、不思議の国は消滅するかと思われた。
が、不思議の国は今でも存在している。

その理由は、彼女の遺した夢の、引き継ぎであつた。

彼女の夢は具体化し、鍵となり、意思を継ぐ者の手元へ渡りながら長い間不思議の国は保たれてきた。

しかし、時計の針同様、ある一線を越えれば、また同じ時を刻まなければならぬ。

つまり、『アリス＝リデル』その人をこの世界に迎え入れなければならぬ時が来る。

意思を継ぐ者は物語を語り継ぐ者。

次に繋げる事は出来ても、『アリス＝リデル』のように物語を綴る事は出来ないのだ。

そうして120年に一度、新しい物語を綴る為に『アリス＝リデル』はこの世に生まれ変わり、不思議の国へ物語の新しい1ページを埋めに来る。

アリスはそれをまた鍵に託しこの世を去る…
そんな時代が流れゆくはずだった……。

* * * * *

「君が、その『アリス』リデル』のはずだったんだよ……」
三月ウサギは目を伏し、語りかけた。

「はずって……じゃあどうして俺はここにいるんだよ？」

「……君は……『アリスの意思を引き継げなかったアリス』なんだ。」

* 綴られ始めた物語 *

紅く彩られた薔薇園に空白の時が流れる。

そうして数秒が経った後、アリスがその沈黙を破った。

「…『アリスの意思を引き継げなかったアリス』…？なんだよそれ！！大体、『アリス』リデル』本人様が来る筈なんだろう！？俺が…そんな訳ないだろ！！」

そんなアリスに対し三月ウサギは宥めるように言う。

「…その通りだよ、アリス。君はアリス『リデル本人でもなければ、その意思を継ぐような人でもない。…この世界に関しては全くの無関係者と言ってもいいくらいだ。」

「だったら…っ！！」

そのアリスの言葉を遮るように三月ウサギは自らの拳を彼に向けた。
「…アリスは…、僕らの愛するアリス『リデルは意思を伝える前に、物語を綴る前に、…死んだんだ。」

そう言って、三月ウサギは差し出した拳を緩め、その手の中から鍵を落とした。

その鍵は結ばれていた紐により、宙に浮いた状態で漂っている。

「アリス。君は…僕らに終わりを告げに来たアリスなんだ。物語に終止符をつけるアリス…。君がこの世界で死ぬと言うことは、同時にこの世界の終わりを告げるという事…。どうゆう訳かは分からないけれど、君はそんな運命を辿って今ここにいるんだ。」

そう言って三月ウサギは席を立ち、アリスの元へ跪いた。そうして彼の手を取り、握っていた鍵を手渡し、彼に話しかける。

「君は言うなれば僕ら不思議の国の住人の全て。この世界をどうするかは君の自由さ。…でもね、アリス…。」

言いながら、三月ウサギは立ち上がった。そうして彼に背を向け澄み渡った空を仰ぐ。

そんな彼にアリスは問いかける。

「なん…だよ？」

その言葉にウサギはアリスに微笑みを向けた。

「…忘れないで、アリス。君は他の誰でもない、ただ唯一の『君』
という存在だから…。」

「…何が言いたんだよ？」

ぶつきらぼうに言い、アリスはテーブルに頬杖をつき、足を組んだ。
そんな彼を見て、三月ウサギはくすくすと笑った。

「良かった…。そんな君の心が壊れないよう、心の底から願っているよ。」

「…は？」

「いや…、なんでもないよ。…さて、前座は終わりだ。」

そう言うと三月ウサギは左手を後ろに回し、右手を前に…アリスを
前に深々とお辞儀をした。

そして今までの口調と違って変わって、大人びた声音で語り出した。

「ようこそ、アリス？我らが不思議の国へ。私はこの世界の案内人
貴方が迷わないよう、女王陛下より城までお送りする使命を受けて
おります。どうぞ、私について来て下さい。」

その三月ウサギの行動に驚いたアリスはぽかんとしていた。

その間にも三月ウサギは歩きだしている。

「ちょ…！！お前、いきなりなんなんだよっ！？」

「はて、何の事でしょうか？それと私は三月ウサギです。三月とお
呼び下さい。」

「だっ！！だから…！！その口調とか！！ってちょ…早いつてー！
！」

* * * * *

そうして、『アリス＝リデル』のものではない新しい物語が綴られ

始めた。

それは儚い夢と運命の物語…。

自分の名すら分らないアリスと終わりを迎えるしかない住人達…。
何を望み、何を得、何を成すため与えられた最後の時間なのか…

終焉へと向かう世界で、最後の1ページがめくられる…。

誰もが夢見る不思議の国。

その夢の国にある誰も知らない物語。

The second story….

三月の微笑

「おい！ちよつと待てつて！！」

薔薇園を抜けたアリスは森の中にいた。先を歩く三月ウサギはアリスの言葉は届いているだろうに、全くその歩く速度を緩めようとしていない。

そうして暫く経った後、突然三月ウサギは立ち止まった。

そうしてアリスに向かい、にこやかな表情で

「アリス、こちらが女王陛下の城です。陛下は先程私が渡した鍵で開く部屋にいらっしゃいます。城の庭は広いので迷わないよう案内しますね。」

そう言った、彼が進む先には庭と呼ぶには広すぎるほどの迷路の庭園があった。

入り組んだそれは要塞と呼ぶに相応しく複雑で、並大抵の努力や記憶力では抜け道など覚えられそうにない。

そんな中をいとも簡単に目の前にいる青年は歩いていく。

その先にある遠すぎるこの要塞の中心、その城にはもはや今日中に着けるとも到底思えない。

…ついて行くしかないアリスにはもう、帰る術はないだろう。

暫く歩いた後、痺れを切らしたアリスが声をあげる。

「ちよつ…待て、ウサギっ！！これ、本当に庭なのかっ！？誰だよこんなん作つたのは！！……っ三月！！」

最後の一言に彼は反応し、そうしてにこやかな笑みを湛えて振り返った。

「やつと名前を呼んでくれたね？アリス」

それは初めて会った時の、あの口調だった。

「なっ！！お前、嫌がらせかよ！？」

それを聞いた三月は声を出して笑った。

「違っよアリス、ただ女王陛下に逆らうと恐いからねえ…ふふ。」

「なっ…最後の笑いはなんだよ!!」

その言葉を聞くか聞かないかのうちに三月は歩き出した。

「だーから…待てっ…て!？」

言いかけてアリスは驚きの声をあげた。

その目の先にある光景には、赤く染まった巨大な鋏を握った三月がいた。

「そっ…それ……」

「はあ…またやってくれたよ。トランプ兵め…逃げ足を鍛える前に学習をすればいいのに…」

そう言っただけ息をついた三月は、鋏を元にあつた地面へと突き刺した。

そうしてアリスの方へ振り返り、きょとんとした表情を浮かべた。そうして何かに気付き、ああ、と声をあげ手を打った。

「違うよアリス。これはペンキ。血ではないよ?」

それを聞いて息をついたアリスは、そのあと三月が小さく言った言葉聞き逃した。

「…どうせ、首は飛ぶだろうけどね」

そうして、日は傾き続け、地平線ぎりぎりまで下降した頃、やっと城の門まで辿り着いた。

それは想像していたよりも遥かに大きく、見上げると首が痛くなっってしまうほどだった。

目の前の門には二人の門番が立っていて、重そうな懷中からしてちよつとやさつとで通してくれるような気配はなかった。

そんな彼らを見、不安になったアリスを横目に三月は門番に軽く会釈をすると、門番は敬礼し、あっさりと門を開けてくれた。

「アリス。中で女王様がお待ちだよ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091d/>

不思議の国のアリス～the second story～

2010年10月11日21時11分発行